走らせた町より

すぎもと まなほ

『走らせた町より』

枚本　まな保

『走らせた町より』

【登場人物】

・上田和夫(うえだかずお)65 歳
霊柩車ドライバー。ドライバーの引退を考えている。

・丹羽聡一(にわそういち)65 歳
和夫の親友。
32 歳のころ、突然姿を消した。

・上田由美(うえだゆみ) 旧：清水由美(きよみずゆみ)65 歳
和夫の奥さん。高校の頃は聡一と付き合っており、結婚もした。
しかしながら、離届を置いて聡一に出て行かれた。

・純ちゃん
和夫と聡一の高校の同級生。
父親がラーメン屋「多田屋」の店主。
彼自身はヒッピーに憧れ、長髪にしていた。

・よし坊
和夫と聡一の高校の同級生。
実家が金持ちのボンボン。
家には珍しくビデオデッキがあった。

・ノリオ
和夫と聡一の高校の同級生。
血の気が多く、喧嘩っ早い性格だが女の子にめっぽう弱い。

・丹羽幸紀(にわゆきのり)
聡一の弟。兄の代わりに父の会社を継ぎ成功している。
幼い頃は兄を憧れていたが、現在は確執ができている。

・純ちゃんの親父
ラーメン屋「多田屋」の店主。

・塩田
霊柩車会社の社長。優しい性格の男。

・吉野
会社の同僚。

○由美の病室（朝）

病室のネームプレートには「上田由美」の文字。
片手に花と着替えを入れた紙袋を持っている上田和夫（６５）が病室の扉を開ける。

和夫「おはよう、由美ちゃん」

由美「おはよう、和夫さん。今日は何かな？」

和夫「今日はね、露草だってさ」

由美「あぁそうだね、もうそんな季節だね。和夫さん誕生日おめでとう。同い年だからもう65歳だね」

和夫「ありがとう。そうだね。そろそろかなとも思ってはいるんだよね」

由美「ん？」

和夫「ドライバーもさ、そろそろ引退かなってね。目は悪くなる一方だし、事故起こしたら笑い事じゃ済まないからね。そろそろ暖かくなってきたし半袖も置いとくからね。」

由美「今日もありがとうね」

和夫「じゃあ行ってこようかな。また夕方来るよ」

由美「はい。行ってらっしゃい、気をつけてね」

○霊柩車派遣事務所・オフィス

社員は社長と他4人の小さく質素なオフィス。
和夫が入り口から入ってくる。

和夫「おはようございます」

社員たち「おはようございます」

和夫は、一際整理整頓された自分の机の椅子に上着をかけて、荷物を置く。
隣の席の吉野（同僚）が和夫に声をかける。

吉野「今日も奥さんにお花を？」

和夫「ええ、まあ」

吉野「奥さん愛されてますね。僕もそんな大切な人に出会いたいっす！」

和夫「出会えますよ」

和夫は、机の上に置かれているシフト表を確認し、
和夫は吉野の欄に「丹羽聡一」の文字を見つける。
固まる和夫。
吉野「上田さん、上田さん！大丈夫ですか？」
和夫「あ、はい。あの！」
吉野「どうしました？」
和夫「…やっぱり大丈夫です、すみません」
少し間。
和夫「吉野くん、何度もすみません。やはり、今日のシフトなんですが交代してくれませんか」
吉野「どうかしたんですか？」
和夫「いや、…あのあまり体調が良くなくてね、吉野くんの行く葬儀場の方がここから近いから変わってくれないかと」
吉野「大丈夫っすか。全然いいっすよ！」
和夫「ありがとうございます。助かります」
落ち着かない様子の和夫。

○同・駐車場

丁寧に車を磨く和夫。
水の入ったバケツを足で倒してしまう。
エンジンの音が鳴る。
手袋を丁寧につけてハンドルを握る。
車はゆっくりと発進する。
緊張した様子の和夫。
ラジオをつけるとフォークの洋楽が流れる。

○タイトル

町を走る車。

○葬儀場・ロビー

霊柩車が数台並んである前で同世代のドライバーと話す和夫。
和夫「今日でね、もう６５ですよ。そろそろやめ時かなとも思っ

てはいるんですよね」
ドライバー「それはおめでとうございます。そうなってきますよね。私もね、ここ数年思ってるんですよ。同級生だった奴らも定年して戻ってきてたりね、するじゃないですか」
和夫「そうですよね…。ちょっと失礼しますね、お手洗いに」

○同・廊下

和夫は階段を登りながら手袋を外す。
前には“←トイレ”の文字。
右手に“丹羽家”と書かれた文字。
和夫はゆっくりと部屋に近づいていく。
部屋に人は１０人ほどの寂しい雰囲気。
和夫は入り口から遺影を見る。
それはかつての親友、丹羽聡一である。

○同・一室

聡一の弟、幸紀が和夫に気づき近寄ってくる。
幸紀「和夫くん！お久しぶりです！うわぁ、来てくださったんですね。どうぞどうぞ！」
和夫「聡一なのか？聡一戻ってきていたのか？」
幸紀「やっぱりご存知なかったんですね…」
和夫「いつ、いつ戻ってきてたんだ！」
幸紀「多分1ヶ月ほど前に突然」
和夫「あぁそうだったのか。そうかそうなのか」
幸紀「兄貴は最期までお二人にあってなかったんですね。実は、再会した時は既に入院してて末期癌だったんです。今頃戻ってきて、入院費やら葬儀代やらもっていかれて散々ですよ。和夫さんはなぜここに？」
和夫「霊柩車のドライバーの仕事で」
幸紀「あ、そういう事だったんですね。よろしくお願いします。…兄貴の顔、見ていかれますか？」
和夫「…いや、遠慮しておくよ」

幸紀「まぁ、そうですよね」
和夫「いや、そういうわけじゃ、じゃあ、失礼するね」
部屋を後にする和夫。

○同・ロビー

棺を積み終え、和夫は遺影を持った幸紀の元へ。
和夫「喪主の方は助手席にお願いします」
幸紀「そのことなんですがお断りしてもいいでしょうか。どんな気持ちで同じ車に乗ればいいのかわからなくて」
幸紀は和夫に遺影を渡す。
霊柩車は、聡一の棺を乗せ出発する。

○霊柩車

ハンドルを握り車を走らせる和夫。
突然、車内に風が吹き込んでくる。
隣には窓を開け、肘をかけながらタバコをふかす聡一が座っている。
和夫「おい、車内は禁煙だぞ」
聡一「最後の一本くらい自由に吸わせてくれよ。そもそも病院でだってタバコもだめ、酒もだめうるせぇんだから。自由に外にも出れねぇ」
和夫「それは仕方ないだろう」
聡一「お前は相変わらず頭の硬いやつだなぁ」
和夫「そう簡単には変わらんだろう、お前だって」

○学校・教室（４９年前）

転校生として高校２年生からこのまちにやってきた和夫。
ガヤガヤとした教室。
黒板には“上田和夫”の文字。
一つ開いた席へと座る和夫。

隣の席の聡一に声をかけられる。
聡一「おう！俺は丹羽聡一。隣の席なのもなんかの縁だ、和夫、昼飯一緒に食おうぜ！」
聡一の笑顔に思わず見惚れる。
聡一「おい、食うのか？」
和夫「お、おう食う」
聡一「よし！」

○同（昼休み）

チャイムが鳴る。
廊下に面した窓から3人が顔を出す。
ヒッピーに憧れて髪を伸のがばしている純ちゃん。
高そうなセーターを着ているのがよし坊。
ヤンキーのノリオ。
よし坊「おーい聡一、いくぞー！」
聡一「おう！ちょっと待て。和夫早く弁当出せ、いくぞ！」
和夫「お、おう」
ノリオ「おい、そいつ誰だよー」
聡一「転校生の和夫だ！こいつも一緒に飯食う！いいだろ？」
純ちゃん「もちろんだ、なぁ和夫、俺らのとっておきの場所に連れてってやるよ！」

○同・廊下

ロックな音楽。
賑やかな廊下を走り抜け階段を駆け上がる5人。
5人のこれからすごす学生生活のハイライト。
勢いよく扉が開く。

○同・廊下

お昼ご飯を食べる和夫、聡一、純ちゃん、よし坊、ノリオ。
聡一、純ちゃん、ノリオがタバコを吸っている。
和夫、聡一のタバコを吸う様に思わず見惚れる。
聡一、和夫にタバコを一本差し出す。
聡一「和夫も吸ってみるか？」
和夫「いや、いいよ。吸ったことねーし」
聡一「とりあえず一口、な？」
和夫は聡一からタバコを一本もらい咥える。
聡一「いいか、火つけるからしっかり吸えよ」
和夫は息を吸う。
聡一はマッチで火をつける。
和夫のタバコにから煙が上がる。
和夫は思いっきり咽せる。
和夫以外は大笑いする。
頭上に広がる青い空。

○車内

雲ひとつない空模様。
車は市街地から山間にある葬儀場へと向かう。
聡一「それにしても、最後までお前に世話になっちまうなんてな」
和夫「お前、なんで会いにこなかった」
聡一「会いにいけなかったんだよ、ぽっくりいっちまったせいで」
和夫「癌だろ？幸紀くんから聞いた。お前のことだからどうせ肺だろ」
聡一「ご名答。だが死因は転落死だ。ちょっくらタバコ吸おうと思って屋上に向かったら階段ですってんころりんだ。そのまま逝っちまった。まったく弱い体になったもんだ。」
和夫「まぁお前らしい死に方だわ」
聡一「まったくだ」

○霊柩車

車が交差点にさしかかる。
信号は黄色。
和夫「あーもう！おい、しっかり捕まっとけ」
聡一「え？」
和夫、アクセルを踏込む。
勢いよく左折する霊柩車。
赤信号になる。
マイクロバスを引き離し走りさる霊柩車。

○マイクロバス

赤信号になり急ブレーキをかける運転手。
前方を見る親族たち。
バスを引き離し左折していく霊柩車。
親族1「あれ、左折していかなかった？火葬場逆ですよね！」
運転手「そうですねぇ」
親族2「大丈夫ですか？」
運転手「は、はい」
静かに去っていく霊柩車を見る幸紀。

○霊柩車

車の上のある手すりを握りしめる聡一。
聡一「おい！何やってんだよ」
和夫「ちょっと面貸せ」
聡一「お前、これから俺焼かれるのわかってんのか、これ以上弟に迷惑はかけられねぇよ」
和夫「ここまで散々かけてきたんだから一緒だ。このまま死なせるわけにはいかない。言いたいことも聞きたいことも山ほど溜まってんだよ」
フロントミラーで後ろを睨む和夫。
唾をごくりと飲み込む。

○公園

車を停める。

和夫「聡一、お前なんで突然いなくなったんだ」

聡一「突然ぶっ込むなぁお前。…金がなかった。それでこの町から逃げた、それだけだ」

和夫「それは知ってる。なんでその時に俺らに頼らなかった」

聡一「すまん。」

和夫「お前がいなくなってから由美ちゃんがどんだけ苦労したか知ってるか。大切な人置いて３０年も何してたんだよ！」

聡一「すまん。」

和夫「そんな薄っぺらい謝罪すんな。お前はなんで由美ちゃんを置いていった。なんで何も言ってくれなかった。俺たちを頼らなかった。何勝手にいなくなってんだよ！」

聡一「…すまない。」

和夫「いいか、お前がいなくなってから由美ちゃんは本当に大変だったんだぞ。お前は自分のことばっか考えて、何も見えてなかったなんだ。お前は…」

聡一「なんでお前がそんな怒ってる」

和夫「お腹にお赤ちゃん一人抱えてどんだけ心細かったと思う！お前にはわからんだろう！」

聡一「おい、ちょっと待て、子供がいたのか。」

和夫「そうだよ！お前が自分に夢中になってる間に由美ちゃんのお腹には赤ちゃんがいた。お前はその変化にすら気づかなかったんだよ！」

困惑する聡一。

聡一「くそっ！」

膝を叩く聡一。

車を飛び出す聡一。

思い切りドアを閉める。

つられて車を降りる和夫。

力なく話す聡一。

聡一「じゃあ由美は一人で子供を…。なんで気づけなかったんだ

よ。何も知らずに30年間、俺は。」
和夫「一人で育てたわけじゃない。」
顔を上げる聡一。
和夫「お前がいなくなってから俺は由美ちゃんと一緒にいた。」
聡一「そうか、そうだんたんだな。」
和夫「すまない。」
聡一「なんで謝る？」
和夫「だけどなぁ、由美ちゃんは多分それでもお前の帰りを…」
聡一「由美は元気にしてるのか。」
和夫「今は入院してる。」
聡一「そうか。和夫が由美の近くにいるなら安心だ。」
和夫「…」
聡一「子は。」
和夫「今は東京だ、結婚して子供もいる。」
聡一「本当の父が別ってことは」
和夫「知ってるよ。はたちを超えた時伝えた。だが、お前は死んだことになってる。由美ちゃんがそう言うことにしようって。」
聡一「そうか」
ベンチに座る2人。
間。
聡一「あー！俺は全くクソな人間だ。最後の最後まで由美に詫びの一つもいれられず。そんなもんなんだよ俺の人生。…実はな、由美に会いたくて今頃になって帰ってきたんだよ。肺癌がわかって自分のしみったれた人生の中で別れを言いたい人を考えた。そん時に、一番最初に頭に浮かんだのは由美だった。でもどんな顔したらいいかわかんなくてよ、結局会いにいけなかった」
和夫「…会いたいか」
聡一「何言ってんだ、無理だ、もう遅い」
和夫「会いたいのか」
聡一「顔みてぇな」
和夫「そうか、わかった」

○車内

車に乗り、外を静かに眺める聡一。

○バス

座席に座り外を眺める聡一。
隣にはくたびれたボストンバックが置いてある。
２３０円の小銭を握りしめる手は皺だらけである。

○空き地（１ヶ月前）

ボストンバックを肩にかけ歩く聡一は、空き地の前で足をとめる。
空き地はロープで囲まれ入れないようになっている。
聡一は歩道の傍に座り、涙を流しながらタバコをふかす。

○多田屋（１ヶ月前）

シャッターの閉められた店の前で立ち止まる聡一。

○多田屋（４９年前）

和夫、聡一、純ちゃん、よし坊、ノリオは賑やかにラーメンを食う。

よし坊「お前由美ちゃんとはどうなんだ？」
聡一「そんなこと聞いてくんなよ」
よし坊「もしかしてまだなのか？」
聡一「な訳ねーだろ！」
ノリオ「こんなこと言ってけど、こいつ初めてなんだぜ彼女」
聡一「うるせー聞こえんてんぞ、お前と違って一筋なんだよ」
ノリオ「うるせー、俺も真美一筋だわ」

女子高生たちが店に入ってくる。全員がすぐさ

まそちらへ振り向く。
純ちゃん「おい、何が一筋だよ」
聡一「これは不可抗力だ」

○車内

シャッターの閉まった多田屋が車内から見える。
和夫「なぁ、ここ覚えてるか？」
聡一「あぁ、忘れるわけないだろ。よし坊の親父さんには俺らほんと世話んなったからな。」
和夫「うまかったな、ここのラーメン。」
聡一「あぁ、うまかった。まさか由美がお前のもんになってるとはな。」
和夫「…実はな、お前らが結婚する直前、由美ちゃんに呼び出されたことがあったんだ。」

○喫茶店（４４年前・由美が和夫と結婚する直前）

ジャズの音楽が流れる喫茶店。
由美と向かい合わせに座る和夫と由美。
アイスコーヒーの入ったグラスが汗をかいている。
由美「私、結婚することになったんだよね！」
和夫「…そうなんだ、よかったな。」
由美「どう思う？」
和夫「どう思うって…。やめとけ…って言ってもするんだろ？」
由美「（最高の笑みを浮かべる）」
和夫「おめでとう」

○車内

和夫「由美ちゃんのあん時の表情、あれ以上のもんは見たことがないよ。」
聡一「そうかよ。由美が元から和夫を好きになってればずっと幸せだったろうに。俺なんか選んじまったからよ」

和夫「高校の時のお前は間違いなく誰よりもカッコよかったぞ。
女はみんなお前にほの字だったじゃねぇか」
聡一「なんも持ってないのになんであん時はあんな自信があった
んだろうな」
和夫「そんなことばっか言うなよ。俺だけじゃない、純ちゃんた
ちもみんなお前について行ってた。お前がいたらなんでも
上手く行く気がしてたんだよ。お前はそう奴だった」
聡一「（苦笑する）」

由美の入院する病院が見える。

○火葬場

幸紀が葬儀屋に電話をする。

○由美の病室

扉が開き和夫がいそいそと入っていく。
聡一は和夫の後ろをゆっくりと歩く。
仕切りのカーテンの奥から由美が見える。
聡一と由美の話し声がフェードアウトする。
聡一は由美を見つめる。

和夫「聡一だよ！」
由美「何を言ってるの？」
和夫「だから聡一を連れてきたんだよ。」
由美「だから何言ってるの？」
和夫「今日ね、仕事で行ったらそれが聡一の葬式だったんだよ」
由美「じゃあ、聡一さんは死んだってこと？」
和夫「…そうだ。」
由美「そう」
和夫「でも聡一が隣に座ったんだ。だから連れてきた。」
由美「…。」
和夫「由美ちゃんは聡一に本当は会いたがってると思って、い
や会うべきなんじゃないかと僕が思って、それから聡一も
会いたいって」
由美「今更何しに？」

和夫「謝りたいって」
由美「あらそう。…和夫くん、ほんとにいるのなら聡一さんも、正直今更どっちでもいいわ。私がそんなに過去に執着する女だと思ってたのかしら」
和夫「いや、そんなことは、だけど」
由美「もう過去のことよ」
和夫「だけど聡一に会いたかったんじゃ？俺はずっと、俺でいいのか、聡一を探しに行くべきなのか、由美ちゃんは幸せなのか、聡一の方がやっぱり由美ちゃんを幸せにできるんじゃないかって」
由美「何バカなこと言ってるの。あなたと過ごしてたったの一度も悲し涙を流したことはないわ。私を置いて出て行った人がこんなにも大切にしてくれているあなたに勝てるわけがないじゃない」
ふと、露草が和夫の視界に入る。
ふと和夫が横を見る。そこには聡一がいない。
和夫「由美ちゃんごめん！いかなきゃ」
由美「はーい、行ってらっしゃい」

○病院の屋上

ベンチに座りタバコをふかす聡一。

○病院のロビー（1ヶ月前）

病衣を着て点滴スタンドを持ってロビーを歩いている聡一。
車椅子に乗る由美とその車椅子を押す和夫。
由美と和夫は楽しそうに話しながら聡一の隣を通りすぎる。
聡一は、足を止め振り向く。

○病院の屋上

ベンチに座りタバコをふかす聡一。
鉄の扉が開く音。
和夫が急いで近づいてくる。
和夫「おい聡一！何やってんだよ。由美と話は」
聡一「いいんだよ、もう」
和夫「また逃げんのか？」
聡一「ちげーよ。ほんとにいいんだよ」
聡一は清々しい笑顔を浮かべる。
和夫「何がかよくわからんが、いいんだな」
聡一「ああ。ラブラブだなお前ら」
和夫「うるせぇ」
しばし無言。
聡一「お前も吸うか？」
昔とおんなじカラッとした笑顔を向けタバコを差し出す。
当時より、シワや白髪も増え、白かった歯は黄ばんでいる。
しかし、和夫にはやはり輝いて見えた。
屋上の扉が勢いよく開く。
塩田が急ぎ足で向かってくる。
塩田「上田さん！何してるんですかこんなところで！みなさん困ってますよ、こんなの前代未聞です！詳しいことはあとで聞きます、とにかく今は早く向かってください」
和夫「大変申し訳ありません」

○由美の病室
外を見る由美。

○スーパーの駐車場(３０年前)
和夫は大粒の雨の中傘をささず、大きなお腹で両手に大きなスーパーの袋を持つ由美を見かける。
和夫は、駆け寄り由美に傘をさす。
由美「和夫くん」

和夫「車、乗って行ってよ」

○同・和夫の車内

車の中の様子が外から見える。

助手席に乗った由美にタオルを渡す和夫。

和夫「何かあったのか？」

泣き出す由美。

雨の音が全ての音をかき消す。

○由美と聡一が住んでいた家（３０年前）

和夫が荷物を運び、玄関に置く。

和夫「じゃあまた」

由美「ありがとう」

一瞬足を止めるが、再び車に向かう。

○由美と聡一が住んでいた家

由美は仕事から家に帰ってきたところ。

インターフォンの音。

扉を開ける。

そこには和夫が立っている。

由美「和夫くん」

和夫「やぁ。夕飯まだなら一緒にどうかなって思って」

○ファミレス（３０年前）

人々の賑やかな会話。店内 BGM。

向かい合って楽しそうに夕飯を食べる和夫と由美。

○由美の病室

由美は外を見つめ微笑む。

○火葬場

家族と離れ待合室の椅子に座っている幸紀。

○聡一の病室（1ヶ月前）

ベッドに横になっている聡一。

病室の扉が開き、幸紀と看護師が入ってくる。

聡一「幸紀、すまんな」

幸紀「…。」

幸紀は聡一に背中をむける。

幸紀「もう大丈夫です」

そのまま病室を出る。

○火葬場・待合室

待合室の椅子に座っている幸紀。

手には力が込められ、スーツをズボンを握っている。

塩田と和夫が幸紀の方へ急足でやってくる。

幸紀は立ち上がる。

塩田「丹羽さん。大変申し訳ありませんでした。お待たせいたしました。では、私は先に準備に向かいますね」

和夫は軽く頭を下げる。

和夫「幸紀くん。本当に申し訳ない」

幸紀「どうされたのですか。」

和夫「信じてくれないかもしれないが、聡一と妻に会いに行った」

幸紀「つまり兄は由美さんにあったと言うことですか？」

和夫「いや、妻に聡一は見えなかった。だが、聡一は確かに妻に会った。と言っても信じてもらえないことはわかっている。勝手なことをして本当に申し訳ない」

深々と頭を下げる和夫。

幸紀「いえ」

和夫「しかし悔しいが君のお兄さんは、やっぱりかっこいいな」

○火葬場・焼却炉前

焼却炉の前に置かれた棺の前には弟家族。
その様子を少し離れて眺める和夫と聡一。

聡一「あれ、俺なんだよな。なんかまだ実感わかねぇな」

和夫「何言ってんだよ」

聡一「どうせ地獄行きだなこりゃ、タバコともおさらばかな」

和夫「…。」

聡一「しみったれた感じ出してくんじゃねぇよ」

和夫「うるせぇよ」

聡一「由美と幸せにな」

和夫「当たり前だ」

聡一「まだしばらくはこっちくんなよ」

和夫「…」

聡一「いろいろありがとな、世話んなった」

塩田がこちらへ近づいてくる。

塩田「私はひと足先に戻ります。話は事務所に戻ってから聞きますから、今は旧友を見送ってあげてください」

和夫「ありがとうございます」

深々と頭を下げる和夫。

塩田が立ち去る。

和夫は聡一の方を振り向く。しかし、聡一はそこにいなかった。

涙を流す幸紀。

焼却炉に入っていく聡一を静かに眺める和夫。

○墓場

和夫は墓標の前にしゃがんでいる。
手を合わせ、線香代わりに、タバコに火をつけて置く。

ビールを墓の前に置き、和夫はコーヒーで乾杯した。

a